

インターバンクの声（2016年9月9日）

昨日の東京市場は、まさに動かざること山の如し、と風林火山の一節が連想されるほどドル円は膠着感が強く、あきれるほど動かない。再来週の日米金融政策会合を待っているから、とそれらしく聞こえる金融機関の解説も、現場レベルでは納得のいくものではない。要するに日米金融政策に対する期待で上げた相場だったが、どこか懐疑心を封印しながらムードに流されながらドル買いに追随しただけに、あらためて上値の重さを確認すれば、妙に納得してドル売りへと素早く転換。同様に円高方向に対しても、黒田日銀総裁、中曽副総裁の発言の内容はともかく、日銀関係者の発言に対しては何も考えずに初動はドル売り、といった潔さが求められるのかもしれない。

しかし常に相場に油断は禁物ということを思いしらされることになったのは週間原油在庫統計での在庫の急激な減少だ。前週の+227.6万バレルから-1451.3万バレルへの急激な減少により原油価格が一晩で2ドル以上急騰し2週間ぶりとなる47ドル台を回復したことからインフレ期待上昇の思惑を誘い、米10年債利回りが1.60%台へ上昇、ドル円も102円60銭まで反発することに。

しかしここからが正念場。今週6日に発表されたISM非製造業景況指数が予想外に低下したことでドル円は発表前の103円38銭から102円05銭へ急落。この下落幅の半値が102円72銭、さらに日足・転換線が102円76銭に当たり、これらの水準を回復できないでいるだけにあらためて上値の重さを確認することになるのか、あるいはこうしたチャートポイントを上抜けていくのか来週の相場を占う上での注目点になりそうだ。

提供：SBIリクイディティ・マーケット株式会社

お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。

本レポートに表示されている事項は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。